

機関誌

e 教育サロン機関誌

「チョウゲンボウ」



第 5 号

2016.8.5

第 7 回シンポジウム特集



一般社団法人 e 教育サロン

<はじめに>

第7回シンポジウムは、活気のあるシンポジウムとなりましたが、テーマ「子供達が大学に望むもの」を掲げたものの、全体討論の中では十分な議論ができずに終わったことは、大変申し訳なくお詫びいたします。これは事務局の力不足によるものであり、今後の反省課題です。しかしながら参加者の皆様には、貴重なご発言のかずかずをいただき、ありがとうございました。

目次

1. 報告 第7回シンポジウム		p 1
2. 報告 退職教員招待講演 2016		p 5
3. JMOOC 講義を受講して	鈴木健之(代表理事)	p 7
4. 西町「金沢サテライトプラザ」小史	宮坂一雄(事務局長)	p 9



I. 報告 第7回 e 教育サロンシンポジウム

2016.6.11(土) 13:30～17:30

金沢大学サテライトプラザ「交流サロン」

テーマ: 大学の役割とは?

～未来を作る子供たちと大学～



「挨拶」佐藤正英理事

I. 基調講演

「変えるべきこと、変えてはいけないこと」

藤原毅夫先生(東京大学大学総合教育研究センター特任教授・
東京大学名誉教授)

[講演要旨]

大学は大変変化した。多様性も見られる。以前の大学と異なって、専門を極める学生は減少したり、おかしげな日本語を話す学生がいたりする。教育で大事なことは、学生同士のコミュニケーションであり、友人により多くのことを学ぶ。教師のできることは、研究、教育、教育支援にまとめられるが、教師の背中を見せることぐらいとなる。教育効果は、2-3年で分るものでなく、20-30年経って評価される類いのものである。従って、現在、反転授業とかアクティブラーニングとかいった“新しい”教育手法が喧伝されているが、これらによって即効的によくなるものではない。しかもこれらの手法は、以前からあったものであり、違っているのは、ICT を利用していることである。

学生は、論理の作り方が大切である。これは図形幾何学によって育まれる。成功物語のお話はそれなりに有効であるが、それより失敗物語の方が効果的である。



理系の学問は変化が速いが、文系の学問は 1000 年の歴史をベースとしている。教養部が無くなったことはまずかった。東大では、全体俯瞰講義を開講している。これによって自分の立ち位置が理解できる。さらに、講義カタログを作り、東大での全講義(8000 科目)を学習できるような方策を行いつつある。キーワードによる検索をタイピングまたは音声でできるようにし、膨大な講義記録を容易に学習できる。



モデレーターの森茂先生

2. パネルディスカッション

モデレーター：森 茂先生 (金沢大学名誉教授)

パネラー： 滝口圭子先生 (金沢大学人間社会研究域)

飯山宏一先生 (金沢大学理工研究域)

細見博志先生 (金沢大学名誉教授)

樋渡保秋先生 (金沢大学名誉教授)

<滝口さんの要旨>

「大学とはどんなところと思う?」と小 5 女児、小 2 男児、3 歳女児にインタビューした。具体的なイメージをもってはいないが、悪い印象ではなかった。大学の進学率は短大などを入れると 80%であり、入るのが当たり前といった印象がある。小学校の週あたりのコマ数の推移を調べたが、国語、算数が増えており、毎日、5 限目までである。生徒との将来の夢などを語り合う時間が少ないところに問題がある。「大学生が小学生にやっていることを話す意味はあるか?」の問には、そう思う。



<飯山さんの要旨>

子供科学財団に携わって来た。子供は面白かった、という感想をいただくが、その後どうなったのかが問われるところである。参加する人はいつも同じである。

大学の先生がやっているのだから、学力が上がるといわれても困る。大学では何をやるか、殆ど説明できていない。二人の大学生と小学生の子供がいて、それなれに大学の話はしている。しかし近所の子供がどうなのかは分からない。

アルバイトをやりすぎるのは、本人にとって考えものである。雇う店の方にも問題がある。



<細見さんの要旨>

研究倫理、技術者としての倫理は大学教育で重要に思う。5/1 は、水俣病60周年に当たる。そのときの技術者は？ 三菱自動車の技術者は？ NASAのチャレンジャー号爆発事件で、4人の重役のうち、1人の技術者が反対したが、経営者の帽子を冠れといわれ、従わざるをえなかった。



技術者の倫理(工学倫理)と企業倫理は、2つの集合であり、部分的に重なっている(共通集合)。この部分がますます小さくなっている。米では、1970年以降、企業倫理としても社会の福祉を優先すべしとする考えが強くなっている。日本でもこうした傾向は見られ、ひどい企業はブラック企業として槍玉に挙がる。工学倫理の形成には、専門的知識に加えて、一般的教養が必要になる。

<樋渡さんの要旨>

昔の学部学生数と今の大学院院生数はほぼ同じとなり、今や大学院が中心的な存在となった。文科省はこれを踏まえて、大学を地域、単科、世界の3

つに分けている。ドクターの学生が増加しているが、かれらは民間に行きたがらないし、民間も採りたがらない。民間がドクターを採りたがらない理由は、専門分野が狭すぎることにもある。

高校の先生を大学院に送る。その穴埋めに大学院の学生をインターンシップとして送り込む(授業の代行)。当然財政的裏付けをする。このような制度を提案する。



<パネルディスカッションのまとめ>

1. 子供達は、大学にどんなイメージを抱いているか。

良いところで、行ってみたい。大きくなったら、入学するだろう。

ただし、はっきりとしたイメージはなく、働きかけもない。

(親が大学に行っていない家庭では、このようなイメージはもたないのではないか?)

子供達は、小1でも5限まで授業があり、忙しい。教師も大変忙しく、保護者も然りである。従って、憧れの将来を語り合う場がない。

2. 子供達に必要なもの

子供科学財団などでは、面白い、と感じている子供は多いが、それを理科の好きな子供にする点が難しい。また、このような子供は限られている。

実験などでの成功体験が重要に思う。

胎児の脳は、時とともに破壊されていく。その時、教育の必要性を考えなければ。



3. 倫理観について

個人がどのようにしたら持てるか。

→ liberal art でカリキュラム化し、教育する。

企業の倫理に反発する学生をどう作るか。人間的強さを育むには？

Diversity を教育すべき教員の diversity が奪われている。

倫理観を形成するためには、社会的制裁が必要ではないか。

(家庭内での倫理観の育成が基本ではないか?)

4. インターンシップ提案について

高校の先生を大学院入学させ、その代わりにドクターをインターンシップとして、高校の授業をさせる。その経済的な保障を予算化する。(樋渡提案)

大学の先生の中高等教育への参画について、現場の声はどうか。

一般的に大学の教員が良かれと思っていることが、果たして？ この逆の声を聞きたいものである。



2. 報告 退職教員招待講演 2016

退職される先生方を招待して今までの研究生活の思い出などをお話していただいた。退官される 3 人の先生と、他大学に移られる横山先生の 4 人の方々に

来ていただいた。

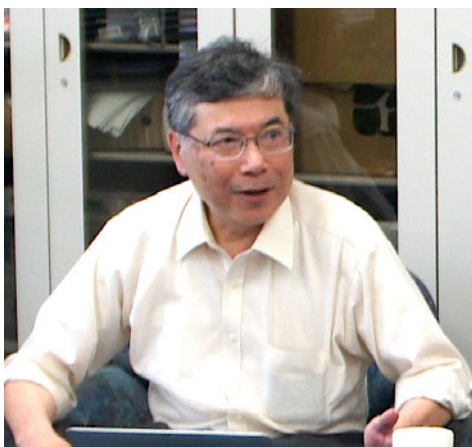
<その 1>

櫻井 武先生(元金沢大学理工研究域)

木村繁男先生(元金沢大学環日本海域環境研究センター)

2016.5.20(金) 17:30～20:00

櫻井先生は、大阪府のお生まれ。大学紛争の華やかな年に、阪大基礎工に入学された。金属錯体に興味を持たれ、生体触媒としての金属酵素の構造と機能の解明をライフワークとされた。金属酵素の中でも、アスコルビン酸酸化酵素、ラッカーゼ、硝酸還元酵素などの銅酵素の第一人者である。大阪、愛知、アメリカ、金沢の大学や研究所を転々とされ、研究のみならず、その環境にも関心を持っておられる。



木村先生は、茨城県のお生まれ。早稲田大を卒業され、三菱電機に就職された。その後コロラド大学の大学院に5年間、カリフォルニア大でポスドクをされ、通産省工業技術院に就職された後、金沢大学に1996年から勤務された。熱工学・流体工学が専門で、地熱発電についての見識も深い。コロラド大学、地熱学会、科学技術庁、機械学会などから受賞されている。

<その 2>

堀林 巧先生(元金沢大学人間社会研究域)

横山 壽一先生(元金沢大学人間社会研究域)

2016.6.24(金) 17:30～20:00

堀林先生は、京都のお生まれ。大阪市立大の時、大学封鎖を経験し、修士過



程では、東ドイツの経済改革を、博士課程ではハンガリーの経済改革をテーマとした。特にハンガリーは、10年ほど研究に没頭し、何度か留学し多くの知識層と交流した。その後バーミンガム大学に滞在し、「社会的欧州」概念を手掛かりとしてヨーロッパでの資本主義の分析を行った。先生は、ソ連共産主義の崩壊などの激動の時代を現地の人々との生の交流・調査を通じて研究に没頭された。

横山先生は、鳥取のお生まれ。社会保障政策をまずフランスについて分析され、続いて日本での展開を分析された。社会保障政策の変容と市場化、それがもたらす社会保障への制約と格差の拡大、これに対置する政策の研究を行った。こうした保障政策の海外での国際比較を行い、石川県での地域・自治体など過疎地での医療・福祉政策を調査・分析され、提言された。学内にあっては、評議員、学長補佐、学部長、学類長、地域連携推進センター長などを歴任され、「大学とは何か」という問いを発し続けられた。



3. JMOOC 講義を受講して

鈴木健之 (e教育サロン代表理事)

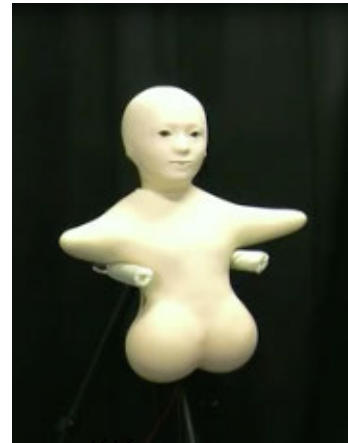
従来、産業型ロボットで日本は世界をリードしてきたが、最近日常活動型ロボットを普及しようとしている。両者の違いは、人と関わる機能の有無である。しかし人とは何か未だ明らかになっていない。従って、人間についての理解を深めつつロボットの開発をしていかなければならない。

日常活動型ロボットの第一人者である石黒 浩さんの講義は、この分野の先端の話題が豊富で、大変興味深いものであった。

人との関わりを可能にしていくためには、パターン認識の技術が必要になる。この技術を進化させ、人の神経ネットワークを解析し、そのシステムをロボットに応用することにより人間らしさが出てきた。これらの技術にはディープラーニング(深層学習)の発達が欠かせない。材質としても硬い金属から、シリコン製の皮膚を採用し、人間らしい表情を作ることができた。腕や手指の動きには、サーボモーターではなく、リニアアクチュエーターを使った人工筋肉により微妙な動きを可能にした。

今までは「問」「答」のロボットであった。これは相手の意図をつかむことが難しかったことによる。これからは意図を理解させ話しあいができるようになるだろう。

現在アンドロイドやジェミノイドは、遠隔操作により話し合いをしている。



ハグビー

テレノイドというロボットが独り者やお年寄りに、好評である。これは人間のぬいぐるみのようなロボット(ハグビー)で、ポケットに iPhone を入れ、例えば孫と電話する。このロボットを抱きながら電話することで、孫と本当に会っているような感覚が生じるという。その時の血液を調べると、コルチゾール(ストレスなどで発散)が低下し、オキシトシン(「幸せホルモン」と言われている)が増加する。

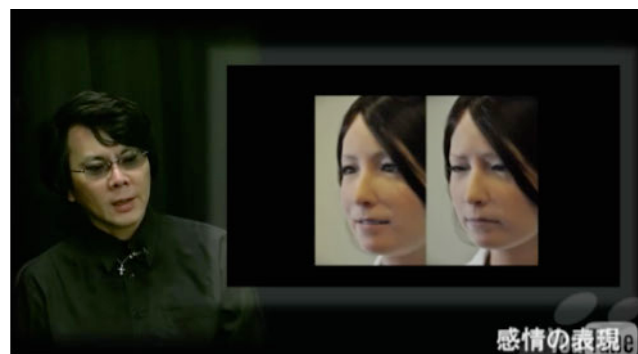
「人とロボットが共生する未来社会」

講師: 石黒 浩(大阪大学教授、ロボット工学)

開講: 2016.3.15～5.31

◇講義内容

- 第1週 ロボットの社会
- 第2週 アンドロイド
- 第3週 人とロボットの関わり
- 第4週 ロボットの進化と人間



左が石黒浩先生

4. 西町「金沢大学サテライトプラザ」小史

宮坂一雄 (事務局長)

今回のシンポジウムは、「金沢大学サテライトプラザ」で開催された。

この「サテライト」、金沢近江町市場に程近い街の中心部に位置し、金沢大学のまちなか情報発信基地としてその役割を担っている。

この「サテライト」が設置されたのは15年ほど前と聞く。国立大学でも広報宣伝が重要視された頃だ。スタート時、“街中にサテライトを！”

ということになったが適切な場所がなかったため、本多町の県立図書館の会議室の一角を借りてスタートしたという。

毎週土曜の開店、スタッフ2人が交替でそれに当たり、展示スペースの準備、パネル、ポスター展示や広報冊子を置いて店開きしていたらしい。はじめは場所や宣伝不足もあってか、来客は10人にも満たず、いや0人の日もあったという。そんな状態がしばらく続いた後、金沢市の粋な計らいで現在の場所を提供いただき今に至っているとのこと。

何事も市民権を得るには、地道な努力と時間、そして我慢？も必要なようである。



http://www.adm.kanazawa-u.ac.jp/ad_koho/satellite/default.htm より引用

あとがき

◆ “第7回のシンポジウム”と“退職教員招待講演”で共通して出てきたお話しが、日本がこれからどんな政権になって、教育をとりまく環境がどんなに変化しようとも、結局のところ現場では教師と学生がいる事には変わりはなく、お互いに“大学とは何か”をしっかりと考え“何を教えるのか”“何を学ぶのか”を自覚する事が大事だということでした。一口に“大学の役割”といっても大学の入口から出口までの問題や、経済や政治の問題などが複雑に関わっているこ

ともわかり、改めて奥深いテーマだと思いました。 大学生としての時間は短いですが、人ひとりを育てる大変さを感じました。

どのイベントも、お忙しい中たくさんの方々にご参加いただきましたこと、心から感謝申し上げます。(C.S)

◆ この5～6月は、恒常的な勉強会に加えて、シンポジウムや金大を退職された先生の招待講演などがあり、とても忙しい時となった。加えるに、当一般社団法人としてのe教育サロンの最初の1年の決算期(2015.8～2016.6)の準備などで追い打ちをかけられた。

直近の第48回勉強会は、人間社会研究域学校教育系の河合隆平先生に、「障がい者差別解消法とインクルーシブな社会作り」のテーマで話して頂いた。最後のビデオ(「男たちの旅路」)で、「障がい者が他人に迷惑をかけないように生きて来た」が、「他人に迷惑をかけることが大切であることに気づいた」という言葉にショックを受けた。「迷惑」をネガティブなものとしてではなく、ポジティブなものとして捉えないと、生きていけない。しかも障がい者と健常者との区別は一面的で、誰しも障がいを背負っているし、弱いところをもっている(「人前でしゃべるのが苦手」とか)。みなの前にさらすことが解決の一步だ。これは人と人の思いやりを築く第一歩となる-----。いろいろな想いを感じさせてもらった勉強会であった。(K.S)



中央が河合先生

e教育サロン機関誌 「チョウゲンボウ」第5号 (2016.8.5)

編集・発行 〒920-1192 石川県金沢市角間町

金沢大学先端科学・イノベーション推進機構内

一般社団法人 e教育サロン事務局

TEL(076)282-9959 e-mail: contact@edusalon.or.jp